

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

緩和医療学 (2000.07) 2巻3号:392～393.

緩和医療学 KEY WORD
ヒポクラテスの誓い

近藤 均

ヒポクラテスの誓い

the oath of Hippocrates

「ヒポクラテスの誓い」の由来

ヒポクラテスは紀元前5～4世紀にギリシャで活躍した医師で、今なお「医聖」「医学の祖」「医学の父」などと尊称されている。いわゆる「ヒポクラテスの誓い」も有名で、医師国家試験の出題範囲にも入っている。とはいえ、ヒポクラテスの実像そのものは謎に包まれている。彼は、俗に「科学的」医学の基礎を確立したなどとも喧伝されるが、他方、その家系は医神アスクレピオスにまでも溯ると伝えられ、「呪術的」神殿医療との関連も取り沙汰されている。

ともあれ、ギリシャ語で約250語からなる「誓い」は、彼が著したとされる約70編からなる医学論集（いわゆる“ヒポクラテス全集”）の一部として今日に伝わっている。ギリシャのすべての神々に対する誓いの言葉、という体裁をとったこの誓詞は、彼が弟子たちに医師の倫理規範を厳しく教え込むために創出したとされてきた。しかし、真相は不明である。タイトルは単に「誓い」とあるだけでヒポクラテス云々とは冠されていないのである。近年では、「誓い」はヒポクラテスより遙か後代に創作されて全集中に挿入されたとする説が有力となってきている（図①）。

実際、現代ではあまりにも有名な「誓い」も、古代文献中での言及はきわめて少なく、現存最古の言及でさえ紀元1世紀のローマの医師スクリボニウス・ラルグスによるものである。混乱・退廃した医療界を立て直すべく、すでに伝説的な名医の榮譽を勝ち得ていたヒポクラテスに仮託して、だれかが後

代に創作した文章なのかも知れない。

「誓い」にみる意思の倫理規範

「誓い」の内容をみよう。要点はつぎの8点である。①恩師には特別な尊敬と感謝の念を以て接する。②学習事項の伝授の対象は原則として門下生に限る。③患者の利益のために全力を尽くし、患者に有害な方法はとらない。④たとえ頼まれても致死薬は与えず、墮胎のための器具も与えない。⑤自分の専門以外のことはその専門家に任せる。⑥診療以外ではみだりに患者を訪れず、ましてや患者を性的欲望の対象とはしない。⑦患者を性別や身分で差別しない。⑧知り得た患者の医療上・生活上の秘密は厳守する。

このうち⑤～⑧は今日なお普遍性をもつ医師の基本的な倫理規範といえよう。しかし①や②は、今日では、極端な学閥主義・秘密主義と批判されかねない規範である。いのちの尊厳を謳っている④の規定に関しても、今日ではもはや無条件には妥当せず、医師は臨床現場でつねに微妙な判断を余儀なくされている。

③の規定も、確かに今日なお普遍性をもってはいるが、ここでいわれている患者の利益は、あくまでも医師の側からみた患者の利益であるから、典型的なパターナリズムである。ここにはインフォームド・コンセントなどという発想が介在する余地がない。現代のバイオエシックスの立場から「ヒポクラテスとの訣別」が声高に叫ばれるのも、このためである。

「誓い」とダイエット

ところで、③の規定は、医師は患者に対して全力を尽くして何をせよというのであろうか。この点はあまり注目されていない。じつは、対応するギリシャ語はディアイテマ（*διαίτημα*）で、これはディアイタ（*δίαιτα*）と同義である。後者はラテン語になって *diaeta*、それが中世以降に *dieta* となり、やがて英語の *diet*、仏語の *diét*、独語の *Diät* などとなった。日本でもダイエットの語はすっかり定着し

ΟΡΚΟΣ

Ὅμνυμ Ἀπόλλωνα ἰητῆρον καὶ Ἀσκληπιὸν
καὶ Ἑρμῆα καὶ Πανάκειαν καὶ θεοὺς πάντας τε
καὶ πάσας, ἴστωρας ποιούμενος, ἐπιτελέα ποιήσεις
κατὰ δύναμιν καὶ κρίσιν ἐμὴν ὄρκον τόνδε καὶ
συγγραφὴν τήνδε· ἡγήσεσθαι μὲν τὸν διδάξαντά
με τὴν τέχνην ταύτην ἴσα γενέτησιν ἐμοῖς,
καὶ βίον κοινώσεσθαι, καὶ χρεῶν χρῆζοντι
μετάδοσιν ποιήσεσθαι, καὶ γένος τὸ ἐξ αὐτοῦ
ἀδελφοῖς ἴσον ἐπικρινεῖν ἄρρεσι, καὶ διδάξειν
τὴν τέχνην ταύτην, ἣν χρῆζομαι μαθηάνειν, ἀνευ
μισθοῦ καὶ συγγραφῆς, παραγγελίης τε καὶ
ἀκροήσιος καὶ τῆς λοιπῆς ἀπάσης μαθήσιος
μετάδοσιν ποιήσεσθαι υἱοῖς τε ἐμοῖς καὶ τοῖς τοῦ
ἐμὲ διδάξαντος, καὶ μαθητῆσι συγγεγραμμένοις
τε καὶ ἄρκισμένοις νόμῳ ἰητρικῷ, ἄλλῃ δὲ οὐδανί.
διαίτημασί τε χρῆσομαι ἐπ' ὠφελείῃ καμνόντων
κατὰ δύναμιν καὶ κρίσιν ἐμὴν, ἐπὶ δηλήσει δὲ
καὶ ἀδικίᾳ εἴρξειν. οὐ δώσω δὲ οὐδὲ φάρμακον
οὐδενὶ αἰτηθεὶς θανάσιμον, οὐδὲ ὑψηλῆσμαι συμ-
βουλίην τοιήνδε· ὁμοίως δὲ οὐδὲ γυναικὶ πεσσὸν
φθόριον δώσω. ἀγνώως δὲ καὶ ὁσίως διατηρήσω
βίον τὸν ἐμὸν καὶ τέχνην τὴν ἐμὴν. οὐ τεμέω
δὲ οὐδὲ μὴν λιθιῶντας,¹ ἐκχωρήσω δὲ ἐργάτησιν
ἀνδράσι πρήξις τῆσδε. ἐς οἰκίας δὲ ὀκόσας ἀν-
έσιω, ἐσελεύσομαι ἐπ' ὠφελείῃ καμνόντων, ἐκτὸς
ἐὼν πάσης ἀδικίης ἐκούσιης καὶ φθορίης, τῆς τε
ἄλλης καὶ ἀφροδισίων ἔργων ἐπὶ τε γυναικείων
σωμάτων καὶ ἀνδρῶν, ἐλευθέρων τε καὶ δούλων.
ἃ δ' ἂν ἐν θεραπείῃ ἢ ἴδω ἢ ἀκούσω, ἢ καὶ ἀνευ
θεραπείης κατὰ βίον ἀνθρώπων, ἃ μὴ χρῆ ποτε
ἐκλαλεῖσθαι ἔξω, σιγήσομαι, ἄρρητα ἡγεύμενος
εἶναι τὰ τοιαῦτα. ὄρκον μὲν οὖν μοι τόνδε ἐπι-
τελέα ποιέοντι, καὶ μὴ συγχέοντι, εἴη ἐπαύρασθαι
καὶ βίον καὶ τέχνης δοξαζομένῃ παρὰ πᾶσιν
ἀνθρώποις ἐς τὸν αἰεὶ χρόνον· παραβαίνοντι δὲ
καὶ ἐπιόρκοντι, τὰναντία τούτων.

図1 「誓い」ギリシャ語原文
(Loeb Classical Library 版より引用)

ているが、単に体重を減らすこと、プロポーションを良くすること、などと矮小化して捉えられている。しかし、原語ディアイタは、「貫いて」を意味する接頭辞ディア (δια) と「行く、進む」を意味する動詞イタオーの語幹イタ (ιτα) からなり、「貫き通す (べきこと)」が元来の意味である。すなわちディアイタとは、病気からの回復を早め健康を維持・増進するために貫徹すべき方法を指す。とり

わけ食事と運動に関する方法であり、「養生法」あるいは「摂生法」と訳すべき語である。つまり、医師は全力を尽くして患者の養生全般に気を配るべし、というのが③の真意である。全集中には『急性病の養生法』『養生法』『健康的な養生法』という著作もあり、ディアイタは全集全体のキーワードの一つとなっている。

医療の原点「誓い」

医師は人命を尊重し人々の健康への奉仕に全力を尽くすべし、という「誓い」の精神は、多くの医師たちに連綿として受け継がれ、20世紀初頭までに欧米から世界各地に広まった。しかし、第二次大戦中、たとえばドイツでは、多くの医師がナチスの人種差別政策、断種政策や安楽死政策に加担し、医学研究の名において忌まわしい人体実験をくり返した。終戦直後の1947(昭和22)年に世界医師会が採択した「ジュネーブ宣言」は、そうした事態への痛切な反省から生まれた。これは、「誓い」をふまえてつくられた、その現代版であり、現在もなお、医師の倫理規範の基本として命脈を保っている。

確かに、パターンリズムの発想には批判されてもやむを得ない面があるとはいえ、この「誓い」こそは、歴史的にも思想的にも、医療従事者が自己の言動を問い直すために折に触れて帰還すべき、まさしく医療の原点なのである。

邦語文献

- 1) 大槻真一郎編：「新訂ヒポクラテス全集」全3巻、エンタプライズ、1997
(同全集第3巻に詳細な欧語文献リストがある)

関連語 D
ヒポクラテス全集
ジュネーブ宣言